

グリオと西欧

(1) ディアスポラ

出水 慈子

Griots and the Western World

(1) Diaspora

Shigeko IZUMI

1章 西欧のアフリカ人 —20世紀以前

サハラ以南のアフリカ人がいつ頃から西欧に渡り始めたか厳密には特定できていないが、古代ギリシャの時代すでに地中海沿岸世界には周縁諸国出身の多数の奴隷が集められていたことはよく知られている¹。とりわけローマ共和国には、主に捕虜となり奴隷身分に陥った人間が数10万人の単位で存在したと言われている。その中にはアフリカ黒人もいたに違いないが、白人奴隷の方が多数であっただろう。しかし8世紀以降、回教徒が南欧征服を遂げてからは、兵士としてあるいは傭兵や軍隊の下士官として、多数のアフリカ人の存在が明らかになっている。本稿はこのような事実をふまえたうえで、西欧におけるアフリカ人の存在、アイデンティティ、グリオの果たす文化的意味等について考察する。

古ガーナ王国やマリ帝国、ソンガイ帝国等のアフリカ王国がサハラ砂漠越え交易により興国し、栄華を極める8世紀から12～3世紀、アラブ諸国との交易には塩や金、武具など物品のほかに奴隷が多く含まれていた。とはいえ大航海時代以前、たとえば15～16世紀のポルトガルにおける奴隷は東欧出身者、ユダヤ人、アラブ人が多く、サブサハラ出身の黒人奴隷はまだ少数派だったという。²ところが16世紀以降その数は右肩上がりに急増し始める。1450～1500年には700～900人程度のアフリカ人捕虜がポルトガルの諸港で売買されていたと推測される [Gnamankou]³のに比して、17世紀には10万人以上のアフリカ人がポルトガル国内で暮らしていたという。リスボンに限っていえば1620年当時、1万470人のアフリカ出身住民が記録されている。そこには奴隷身分のものばかりではなく、自由を買うことが出来る制度による自由民もある程度含まれていると

1 奴隷の項：世界大百科事典 平凡社 1998。

2 Denise Brégand, *Commerce caravanier et relations sociales au Bénin : Les Wangara du Borgou*, L'Harmattan, 1998, p 64. 他多数。

3 Dieudonné Gnamankou, *Les Africains en Europe avant le XXe siècle*, in *Le Courrier ACP-UE*, Juillet-Août 2001.

考えられている。

さらに同論文では、ポルトガル以外のヨーロッパ全域におけるアフリカ出身者の一般的傾向は以下のように把握されている。即ち17世紀以降、ヨーロッパ各地にみられたアフリカ出身者急増の原因は、16世紀～19世紀までアメリカ大陸に向けて拡大した大西洋奴隷貿易だった。アフリカ人奴隷はアメリカ経由とアフリカから直行という二つのルートで西欧に大挙送り込まれた。加えてアフリカの自由民も到着した。18～19世紀にはアフリカの若者たちが、勉学のために家族の経済的支援によりフランスと英国に留学した。なかには植民地を離れ、宗主国の首都で子供を養育するため、家族ぐるみでやってくる自由民もあったという。フランスでは1738年以降、フランス本土における奴隷保有を法律で禁じられているにもかかわらず、4千人を優に越える奴隷がいたし、18世紀末になると1万人以上の奴隷と数千人の自由民がいた（これらのうち千人前後は軍隊所属だった）。フランスでは現実には激しい反対にあいながらも、フランス人と婚姻したものは自由を獲得することができた。したがって1716年ナントでは、黒人男性とフランス人女性との婚姻を禁止する市の条例を公布したほどだった。その後「主人の許可があれば婚姻を許可する」国の条例が出たが、1738年「主人の許可があっても婚姻は禁止」となった。他方ロンドンでは1787年当時2万人以上のアフリカ黒人が居住し、多くは軍隊、特に王立射撃部隊にいたという。

これら当時の住民たちは、たとえば16～17世紀ポルトガルとスペインでは、宗教的文化協会などをつくりグループ化され、さらには自分たちの権利や逃亡中奴隷の保護のために、あるいは自由を買うために等の目的を掲げて団体を結成し、西欧における黒人の権利と自由のために戦う闘士も少なくなかった。フランス、オランダ、英国で奴隷が禁止されてからは、主人について首都や都会にやってきた奴隷が、そういう人々の支援を得て主人を訴えることも辞さなかった。実例としては1772年J.サマーセット勝訴が知られている。⁴

18～19世紀はアメリカ大陸とカリブ海諸国で大規模なプランテーション農業が発展し、黒人は奴隷、主人は白人という絶対的峻別がなされ、人種差別の概念をヨーロッパ世界に告知、徹底させる原因になり、黒人の劣等性なる偽の神話の温床にもなった。しかしながら、ヨーロッパでは非奴隷身分のアフリカ人が確かに存在し、社会の様々な層に分布していた。彼らは少数だが、支配層の使用人、主婦、労働者、職人、兵士、水兵、将校、将軍、学生、哲学者、音楽家、作家、画家、技術師、大土地所有者、伯爵、宗教家、聖人、スポーツ選手等々、多様な位階及び職種に分布し、ある時代、ある地域においては有名人であり、決して奴隷身分のものばかりではなかった。さらにアフリカ人のディアスポラは数世紀にわたり全ヨーロッパで行われていた⁵。即ち、西ヨーロッパのフランス、イギリス、スペイン、ポルトガル、ドイツはもちろん、北歐スカンディナヴィア諸国、さらにオットーマンの時代にはボスニア、セルビア、モンテネグロにいたる東欧、

⁴ Dieudonné Gnamankou, Les Africains en Europe avant le XXe siècle, in Le Courrier ACP-UE, Juillet-Août 2001.

⁵ "La traité des Noirs en direction de la Russie" in *La Chaîne et le lien*, Doudou DIENE (Ed.), Paris, Editions Unesco 1998.

ロシア帝国時代にはウラル地方にまで分散している。驚くべきことに現モンテネグロの南西に位置する Ulcinj には、ハウサ語を話すアフリカ人の村が残存しているという。

アフリカ人の西欧における存在のありようは、その研究が端緒についたばかりという事情もあり、奴隷あるいはそれに類する悲惨な生活を強いられていた人々、「差別される存在」というイメージがあらゆる言説を覆い隠している感があるが、実際には必ずしもそうではない存在として、知られていないことも忘れてはならないだろう。非常に少数ではあるが非奴隷のアフリカ人は、西欧という反黒人的文化に根をおろしつつ、彼ら自身の文化を根拠にされることなく、アフリカ系ヨーロッパ人として新たなありようを切り開いていったに違いないからである。しかし、彼らの文化的アイデンティティの内実と言及すること、ましてこういうアフリカ人のなかにグリオを特定することは、その可能性さえおぼつかないであろう。とはいえ、グリオはグリオであるべくして生まれ、育まれた生業を背負ったひとびとである。その事実は歴史的にその起源を遡りうる12～3世紀から21世紀の今日まで安定して変わらない。その身分が奴隷であろうと（西欧において）自由民であろうと、グリオはもって生まれたアフリカ文化における非奴隷にして非自由民であり、「ことばの師」であることを恐らく西欧でも忘れなかったのではあるまいか？西欧のアフリカ人を遡る研究が困難である以上に、20世紀以前の西欧におけるグリオについて推測できることはその程度である。

2章 西欧のアフリカ人 —20世紀フランスにおける移民潮流

現代ヨーロッパにおけるアフリカ人は「移民」の謂いであり、ヨーロッパにおける移民受け入れ大国はフランスである。フランスはヨーロッパのどの国よりも多数の移民を受け入れ、1920年代以降、20世紀の大半を通じて最も重要な移民受入国だった。しかしながらフランスでは、移民問題は英語圏で通例「エスニック・マイノリティーズ」と分類されて扱われているのと異なり、人種関係問題であるため、たとえばフランス以外の国で出生し、現在フランスに在住している者に関して断片的なもの以外ほとんどデータがない現状である。それと呼応するように「フランス人一般は移民がフランスの歴史的発展に貢献してきたという認識はなかった」⁶ フランスは英語圏の諸国やカナダ等の移民国家と異なり、18世紀以前に中央集権的な君主制が確立され、以来ずっと国民的帰属意識がフランス人には刷り込まれ維持されてきている。したがって大規模な移民が発生しても異民族意識はなく、その実態も調査されることはなく⁷当然記憶されることにはならなかった。

とはいえ「移民」は現代フランスを語るときに避けられないキーワードとなった。1851年から

6 Noirjel. G., *Français et étrangers*, in P. Nora (ed.), *Les Lieux de mémoire*, III : *Les Français*, vol.1: *Conflits et partages*, Paris : Gallimard. 1992, p.p. 275-319.

7 フランスで移民問題の本格的研究が始まったのは1980年代になってからのことである。

1990年にかけてフランスの全人口に占める外国人の割合を見ると⁸1.06%から6～7%の間に増加している。フランスは移民なくして成立しないほど移民に依存するようになったのである。こうした事態を受けて1993年6月、シャルル・パスクア内相は彼の属する保守中道政権の目標のひとつは「移民ゼロ」と発表している。⁹移民者がフランス社会で可視的になり、フランス人の政治的公的見解として示されることは、単にフランス以外の国々から移動してきた人々の処遇問題ではなく、彼らの定住に伴い起きた深刻な問題をこの際解消してしまいたい、というフランス人の正直な見解といえよう。1930年までを区切れば、外国人が総人口を占める割合はアメリカよりフランスの方が多¹⁰という事実に注目するべきであろう。

以上の理由から、ヨーロッパへの移民を知る上で20世紀フランスにおける移民史を概観してみると次のようなことが理解される。流入人口については19世紀に労働力不足が生じ、貧困な農村部から都市部へ相当数の人口流入が誘発されたが、国内の人口移動だけでは当時の需要に応えられず、外国人労働者が（一時的、定住型）続々と入国した。1851年時点で外国人が全人口に占める割合は1%であったものが、30年間着実に増加し3%台にまで伸びている。20世紀に入り第1次世界大戦前後までその傾向は維持され、1931年には6%に達した。¹¹1930年代の不況時には移民流入は冷え込み徐々に下降していったが、第2次世界大戦後に到来した“繁栄の30年”間に再度6%に上昇し安定した。その後経済成長は弱まり失業率の上昇が逆に可視的になったにもかかわらず、1970年まで6%前後の数字は維持されている。

もうひとつフランスの移民形態でふれなければならないことは、外国人移民の出身国別内訳である。古代よりフランスはもちろんヨーロッパにおける移住者は白人が多かったが、奴隷貿易の強化拡大により奴隷廃止が徹底するまでの間にアフリカ黒人がその大多数を占めるようになった。奴隷制度廃止後、20世紀初頭に経済的誘因による外国人移民労働者潮流が始まった。多くは近隣諸国からの白人労働者がその中心だった。1920年代以前はベルギーとイタリア出身者が在仏外国人の半数を占めており、フランス東北部の国境沿い地帯の産業はベルギー人により支えられていた。南東部の未熟練労働に従事していたのはイタリア人であり、スペイン人がそれについて多かった。スペイン人は南西部の農業労働に従事した。¹²そのほか両大戦間にポーランド人コミュニティが急増し、農業や鉱山の労働を担った。1931年までに彼らは鉱業労働人口の半数を占めるほどの増加を示したが、鉱業不況が何万人ものポーランド人の帰国を促した。第2次世界大戦後には10万人規模の帰国が続き、鉄のカーテンによりポーランド国境が封鎖されると事実上彼らのコミュニティは沈滞した。¹³上記移民者のイタリア、スペイン人集団はムッソリーニ政権下、あるいは

8 国立統計経済研究所 (INSEE) 1992 表R 2, R 3.

9 Le Monde, 2 June 1993.

10 Noirjel. G., Le Creuset. 1988, Français :histoire de l'immigration, xIx°-xx° siècles, Paris,Seuil,p.21.

11 国立統計経済研究所 (INSEE) 1992年、表R 2, R 3.

12 Drefus and Milza 1987; Cahier de l'Observatoire de l'Intégration 1994 in 現代フランス p34.

13 Ponty, Polonais méconnus :histories des travailleurs immigrés en France dans l'entre-deux-guerres,Paris, Publications de la Sorbonne 1988.

スペイン内戦下、政治的亡命者として数10万人が国境を越えたが、原因が解消されると残留と帰国のどちらかで個人的選択がなされ、結局外国人の占める割合は6%前後に落ち着いた。アルメニア人、ロシア人、ユダヤ人など、政治的迫害の結果フランスに受け入れられた人々の集団も看過できないが、いずれも白人の外国人であった。

20世紀後半になると、フランスは外国人労働者を国策上どのように定義し位置づけるかを議論したが、労働力不足解消の手段（ジャン・モネ）論と出生率低迷を埋め合わせるための家族ぐるみ定住移民推奨論（アルフレッド・ソーヴィ、ジョルジュ・マウコ）の二つが有力だった。次いで移民の国籍割り当てについては、アフリカ人とアジア人は好ましくない、ヨーロッパ人を優先するという合意がなされた。1945年には政府の政令にそれらが盛り込まれ、移民を「滞在」と「就労」に分けて許可する決定を行った。こうして「移民は労働力要員」で「家族の定住も余り厳しくしない」という基本方針が実行されるようになった。ところが実際には、ヨーロッパ人はフランスの労働市場に惹きつけられなくなっており、マグレブ、アフリカからの移民大潮流を招来することになった。フランス在住外国人に占めるヨーロッパ人の割合は減少し続け、1946年には89%であったのに1990年には41%まで落ち込んだ。それに比してマグレブ出身者は1946年の2%から1982年39%に上昇した。¹⁴なかでもアルジェリア人は1946年には2万2千人足らずであったのに、1982年には80万5千人を越え、フランス在住外国人のなかでは最大多数の民族集団を形成するにいたった。サハラ以南のアフリカ人は1962年頃から少しずつ増え始め、1990年には外国人中6.7%を占めるようになった。注目すべき数字はサブサハラ・フランス語圏出身者の41.3%が女性であり、これは家族との定住者が多いためと推測されている。¹⁵

1971年移民停止条例：フランスの対移民政策は「労働力不足の解消」と「出生率低迷の解消」というフランス発展のためには都合のよい解決策だったが、経済的低成長や失業率の上昇、移民者の処遇をめぐる社会的問題の深刻さが増し、1971年移民停止条例発布、74年ついに移民受け入れ停止令が実行された。ヴァレリー・ジスカールデスタン大統領のもとになされた移民政策転換のひとつだが、「永続する暫定措置」であり包括的な禁止にはならない欠陥を内包していたといわれる。¹⁶その結果、停止令以後の移民を考える上で停止令以前の移民と本質的に区別される変化が明白になった。それは公的に明言され定義されていたわけではないが、それまでにフランス人一般の固定的観念となっていた事項の追認であった。即ち「労働力不足の解消」は労働市場が活発であることが条件であり、当然のこととして移民（immigrés）は移民労働者の同義語とみなされ、とりわけ未熟練労働者として扱われた。¹⁷停止令以前に外国出身の移民および集団はおしなべて外国人移民だったが、停止令以降は亡命申請者、難民は政治的迫害者として経済的移民の

14 国立統計経済研究所（INSEE）1992年 a、表R 6.

15 国立統計経済研究所（INSEE）1992年 a、表10.

16 『現代フランスー移民からみた世界』、アリック・G. ハーグリーブス（石井伸一訳）明石書店 1997 p46.

17 Sayard ,Qu'est-ce qu'un immigré ? *Peuples méditerranéens*,no.7 (April- June)1979,p.p.3-23.

枠外におかれ、専門的有資格者の就労は困難ではあるが扱いは移民（＝未熟練労働者）ではなくなった。また、これらの移民は非ヨーロッパ人であったため、語の一般的使用として「移民」は本質的に第三世界からの経済移民ということになった。他方、他の西側諸国からの移住者は外国人（étrangers）として区別されるようになったのである。

では、停止令はこの定義に合致する移民の減少を実現させたかという点、1974年以降2000年にいたるまでマグレブを中心とするアフリカからの移民は6%を維持したまま下降していない。それに加えて何の効果も見せない停止令を、1978年フランス最高行政裁判所である国事院が、移民禁止を違法であると判定した。以降停止令は逆に家族の再統合を望む移民者にとっての原理原則として効力を発揮し、また有資格者移民の流入のさいの条件となった。停止令直後1979年頃までは、移民労働者の多くが一定の宿泊所や施設に集団で居住していたが、1980年代以降は家族の人数が移民審査の基準となり、彼らは一般フランス人から隔離されることなく住宅地域に居住するようになった。子供は就学し、コミュニティにおいてフランス人と同じ消費を伴う日常性を保ち、回教徒は独自の寺院に集うようになった。宗教上の慣習をめぐる教育現場では問題も顕現するようになった。

フランス政府は1977年から1981年にかけて移民労働者担当相リオネル・ストレルが移民人口の減少を目標に新たな政策を展開した。それはマグレブ系移民の帰国支援策で、奨励金を与えて帰国させようとするものであった。しかし実際にそれを活用したのはスペイン人やポルトガル人であり、マグレブ人など第三世界出身者は、帰国すると再度入国が不可能になることを懸念して、逆に家族を呼び寄せるものが増加した。結果、移民者数は増加し、亡命申請者と不法移民流入も増加するということにもなってしまった。1974年停止令執行以前は、多数の外国人労働者が不法滞在を続けた場合、政府により労働力不足を補うという口実で黙認したり、必要書類を発行もした。しかし停止令以降それは不可能になり、例外的に1981～2年特別アムネ스티が実施され、13万2千人を超える不法移民が合法化されることはあったが、1990年以降、不法滞在者は少なくとも30万人以上に達している。¹⁸不法滞在者の数は出身国ともに正確には把握できないが、そのほとんどは第三世界の出身者で、ちなみに1981～2年に合法化された人口の61%がアフリカ人、そのうち46%がマグレブ出身者で占められていた。そのさいに4万9千人が不法滞在者であることをあきらかにして合法化を申請したが、認められたのは1万2千人で、そのうち90%がアフリカ出身者だった。¹⁹資格外労働者が移民人口に追加される以外に、毎年10万人以上の外国人が公認の手続きに従い居住許可を取得しているが、全体の半数はアフリカ人とアジア人である。

統計上では外国人人口の割合は、1975年の国勢調査では340万人、1990年には360万人と余り変わらないことがわかっている。しかしその間、毎年10万人の外国人がフランス国籍を取得し、

18 L'Expansion, 19 March 1992.

19 Lebon, *Immigration et présence étrangère en France: le bilan d'une année 1992-1993*, Paris : Ministère des Affaires Sociales, Direction de la Population 1993, p.104.

1993年以前のフランスで生まれた子供は成年に達すると、自動的にフランス国籍を取得した。また両親のいずれかがフランス人である子供も容易に国籍を取得したし、旧フランス領に生まれた子供も出生時にフランス人となった。こうしたいくつもの事例が1993年の国籍法改正で修正されたが、今日フランスに生活しているおよそ1千万人が移民の子孫である。²⁰マグレブ出身者に比べればサブサハラ出身者はその半数以下で多数派ではない。しかし旧植民地でフランス語を公用語として習得した多くのフランス語圏出身者たちは、合法・非合法を問わずフランスの各地に分散し生活しているという点では、20世紀以前に奴隷あるいは自由民としてフランスに移住し、フランスに帰化した先祖たちと共通する点が多く、決して異質とはいえないといえよう。

第3章 共同開発そして米大陸への移民

21世紀、フランスへのアフリカ出身移民対策は大きな転換を迫られつつ、その方向提示と実行は少しずつ緩慢に動いているように見える。もっとも容易な流入規制は1974年以降、20世紀末に実施され始めた。1989～1991年にミシェル・ロカール首相は「フランスは世界の悲慘の後始末を迎え入れる余裕はない」と言明した。ヨーロッパのどの国々より政治亡命者を受け入れていたフランスは「悲慘」の内容を政治亡命と経済移民の両方を含むものとして定義してきた経緯があるが、先述したように、「フランス経済発展のための移民」という基本的概念が定着してからは、文字通り移民と人権問題は別のカテゴリーに分類され、経済事情が安定しのに低迷に陥ると経済移民は貧困層として可視的になり、ひいてはフランス人失業率上昇原因のひとつとさえ非難されるようになった。フランスへの入国は日増しに厳しくコントロールされると同時に、フランス滞在者の帰国奨励強化がなされるようになった。たとえばマリとフランス両国政府は一定の努力をしてきたにもかかわらず、目標達成には程遠いのが現状であり、フランス社会経済閣議はC A P 保有者の70%が再度フランスへ舞い戻っていると報告している。そこでフランスは2003年、移民流出政策のひとつとして、マリ出身の母国帰国希望者に対する特別奨励助成金を倍額にした。マリ国籍の正規移民者の帰国を援助しマリの地域発展をはかると同時に、フランス不法滞在者の再入国手続きについては不問のままに置かれた。帰国奨励助成金は7000ユーロになり、去年は40人程度の希望者しかなかったが、今年が増加するものと期待されている。この対応策でもっとも大事な点は、4万人ともいわれる不法滞在者や、国境で停止を食らっているマリ出身者に対しても適応されるという点である。しかしこの助成はマリにとって有益で実現性のあるプロジェクトを提示するという条件がついている。上首尾にいけば75%の移民者を占めるマリのカイ地方発展のためになると推測されるが、同時に重要な問題点の解決とはなっていない。帰国しても期待通

20 『現代のフランス 移民からみた世界』 アリック・G. ハーグリーブス（石井伸一訳）明石書店 1997 p.57.

りいかなかった場合、再入国が事実上ほとんど不可能になるので、むしろ長期滞在を婉曲的に推進している印象さえ与える結果となっている。海外で有益な働き場所がある人々、高等教育を受け、高い資格を持つアフリカ人は、往々にして母国では資格に見合う職業がなく、その資格を活かせない。物質的豊かさと快適な生活、政治的安定などのなかで人格形成を行った彼らは、再入国への可能性を閉ざされた帰国を奨励されても、慎重にならざるを得ないのが現状である。

このような人々の教育、科学、医者、企業などにおける活躍はたしかに頭脳流出ではあるが、彼らの母国への送金額が重要な意味を持っているだけでなく、民族文化や出身地域、血族への執着が非常に強いため、彼らのとる立場は、出身国および流出先のヨーロッパ諸国に新たなパースペクティブを与え始めていることも看過できない。こうした事実が流出先諸国への貢献という観点からではなく、出身国を含む両者の利害関係を踏まえ、共栄共存的方向を目指す共同開発プログラムを設立させる動きを見せ始めた。たとえば、遠隔地域の観光、農業、文化、新たな活動の創造等々の開発を奨励し援助する計画で、それらを帰国奨励制度と併用する考え方である。共同開発計画はアフリカ諸国の開発に新しい道を開く経済的新しい概念であり、たとえば具体的な例として、〈アフリカサーチ〉は人材派遣の会社としてアフリカ市場に参入しているが、元フランス滞在者であるアフリカ人幹部により運営されている。実現し軌道に乗った事例はいまだほんの少数にすぎないが、移民はある地域を貧困化し、他地域の利益発展に寄与するための集団移動ではなくなった。21世紀の移民は双方にとっての“好機”と捉え、様々な計画も可能になるだろう。

上記のようにフランスにおける移民史の概略をたどれば、フランスはもとよりヨーロッパが経済発展のためのアフリカ人移民流入を大量に受け入れる時代が終焉したことは明白である。フランスやヨーロッパへの移民が困難になった現在、経済的移民の流出の勢いは止まることなく、合衆国やカナダに向かっている。アメリカにおける外国人労働者人口は毎年増加の一途をたどり、1996年～2000年に合衆国の労働者人口の半数を占めるに至っている。²¹移民者合計においては最多数ではないが、アフリカ人移民数もうなぎのぼりに増加するばかりである。旧宗主国であるフランスやベルギーより、英語を学習してアメリカに新しい土地を見出そうとするアフリカ人は、1850年には551人と極少数だったものが、1990年には40万5千人になり、1998年には64万5千人と、毎年1万5千人ずつ増加している。そのうち88%は中等教育修了者であり、他の移民グループの資産よりアフリカ人の資産が群を抜いて高い²²。原因はフランスでは多くの書類や条件を強いられるが、アメリカでは一旦カードを入手すれば一生の自由を保障される制度に起因するが、同書によれば、アフリカ出身者はアフリカの資格がアメリカではほとんど互換がきかないため、就職と同時に資格取得を目指し、グリーンカードに加えてアメリカ国籍の取得をも目標に努力を重ねるといふ。経済移民や政治亡命者にとってのアメリカ国籍は“自由”を彼らに保障し、母国

21 Mosisa, Abraham T.: Monthly Labor Review: 5/1/2002.

22 Olivia Marsaud, *L'Amérique, nouvel eldorado des Africains ?*, 24/9/2000, afrik.com 1097.

への安全な里帰りも約束させるものである。以前のように容易に移民許可は下りないにしても、アメリカの移民受け入れが現状と余り変化しないかぎり、「アメリカンドリーム」は多くのアフリカ人の手の届く範囲にあり、アフリカ人にとってアメリカは Marsaud の言うように、ある種のエルドラドであることは確かである。しかし、そのエルドラドも永久に続くわけではない。今後はますます双方向的、或いはそれ以上に多方向的、共存共栄の共同計画が考案され、実行されるべきだろう。

第4章 (イ) アフリカ出身移民と文化アイデンティティ

文化の基本は、「意味と価値について人間が創出したものごとにある」と本稿では理解している。意味と価値についての集団の基準(=コード)として特定の文化の基底に言語があり、ある場合には宗教がある。近代国家は戦争を含む多大の犠牲を払い、少なくとも自国領土内における文化の再生産を強力に推進し、その手段に関して絶大な権限行使をした。1～2章において、アフリカ人が或いは奴隷として或いは移民として西欧発展の下働きを担い続けたこと以外に、彼らのありよう、彼らの文化やアイデンティティなどについてはほとんど不明であることがわかった。しかし現代に於いては黒人のディアスポラに限らず、多数の人口移動が発生し、行き先国内に永住的に留まるとき、多様なマスメディアやインターネットなどの進歩も相まって、アイデンティティのみならず、予想外の現象や異民族間の摩擦による深刻な問題が多発している。現在、文化体系の伝達に大きな影響を及ぼしているのは、家族、教育、マスメディア、インターネットなどだが、移民者が誕生地以外で育ち、或いは移民2世3世として成人するとき、これらの移民集団の個々人にはアイデンティティという深刻な課題が突き付けられる一方、滞在国にとっては異文化保有者である1世、彼らとは異なる文化アイデンティティを持つ2世、3世など、複雑な基準の所有者と直面し、あらゆる場面において変更を迫られるのである。フランスでは移民と文化に関して、外国人の結社の自由や、公的教育制度への義務、テレビを中心とするマスメディアの番組編成、ビデオの普及、音声映像部門の文化輸入等々、多角的なアプローチに配慮がなされるようになり、その方面の研究考察も多く見られるようになった。

そして、先行きは明るくないが、移民とその文化の今後を考える上で最も重要な基本であると思われる(1)移民先国側の一方的かつ搾取的移民の活用時代は終焉したという認識と(2)、共同開発という発想が定着し始めた。このような事実とともに、移民者にとっての文化とアイデンティティは、啓蒙運動時代から受け継がれているような古典的な概念、つまり「文化は自律的な自我を育成」し、アイデンティティはしたがって外部世界の文化の影響は少なく「確立したもの」とする考えは支持されなくなりつつある。アイデンティティは固定したものではなく、むしろ絶えず開かれ、あらゆる影響を吸収しながら形成されるもので、「動的」この上ないものと考えることにより、移民者の複雑なアイデンティティ複合は理解しやすくなった。アイデンティティ

を「人がそれによって自己の人生を体系化する意味と価値の様式である」とするならば²³移民者はその境遇からいっても、様々な社会や文化の間を移動するアイデンティティを持つのはむしろ自然といえよう。民族のアイデンティティに結びついた文化の基準は「原初的結合」²⁴段階といえるが、実際には稀少な事例しかない。個人、集団を問わず新しい基準を人生の途次に習得し、基準変更を理性的やり方でためらいつつ実行することが多いからである。

先述したように、移民者にとって言語、家族、教育、宗教、マスメディアが彼らの新環境における基本的な影響要素であるとする、マスメディアや個人的パフォーマンスを通して行われるグリオの文化的関わりかたはそのひとつと考えられる。しかし出身国文化をもたらすグリオとの関係は非常に近い性質のものであるにもかかわらず、アフリカ出身移民者との関係についてこれまでほとんど言及されていない。西欧に生きるアフリカ出身者と直接的関係を結びうるグリオは、移民者の生成変貌する文化的アイデンティティに動的文化ベクトルとして指標を示すと同時に、移民者の複雑な文化をも吸収しつつ、西欧の聴衆をも巻き込んで、まさに文化的双方向的パフォーマンスを行う。彼らのパフォーマンスによる影響力は、西欧にアフリカ文化という異文化を紹介するだけでなく、むしろそこに滞在する移民者集団の文化を形成し、誤解や幻想にみちた側面を包含しつつ、それでも西欧にアフリカ文化を浸透させる力として働いている。西欧のアフリカ人はその長い滞在の歴史を通じて、文化面における担い手としては全く認知されてこなかったが、現代においても移民者が帰国し、奨励策が成功することでやっと共同開発計画は成立するに過ぎないし、奨励策も今日端緒にたったばかりである。一方グリオはグリオの伝統的なありようそのものの特質により、進出先の西欧においても文化の担い手として認知され始めている。

(ロ) 起源としての口頭伝承文化

アフリカ出身移民者の背景となる文化最大の特徴は口頭伝承文化である。アフリカでは文字導入後も文化の基底に口頭伝承文化が根強く残存し、声に出して発することばによる多様で豊かな活動がある。多くの文字優先社会では、ことばは独立的に視覚に訴える物質のようにあるために、ことばがどのように発せられるかについて無関心だが、口頭伝承文化においてはことばは音楽であり、音楽と一体化している。またことばは過剰なほどの意味を担い、しばしばそれらは符号化されている。さらに伝承されるべき知識、文芸、教え等々が様々な形式や基本的モデルに準ずるなどして、レパートリーとして記憶保存され、それらほとんどすべての言説が歌や楽器、音楽と密接に結びついて維持されている。とりわけトーン言語社会では、話者たちにとって発話とはメ

23 『現代のフランス 一移民からみた世界』アリック・G. ハーグリーブス（石井伸一訳）明石書店 1997 p.149.

24 Geerts,C.(ed.) Old Societies and New States: The Quest for Modernity in Asia and Africa,New York : Free Press, 1963: p.109.

ロディーを伴う音楽的表現であり、「言語行為は音楽と不可分の一体」を成しているといえる。この事実が後述するトーキングドラムに代表される楽器ことばの母体であることはいうまでもない。

ことばと音楽の一体化を、口頭伝承文化におけるあらゆる言表行為のジャンル体系のなかで検証すると、文字優先の文化とは対極的な事実が多々見られる。多くのアフリカ社会で、単純に歌われる言表行為と散文的発話を区別したとすると、前者は後者を圧倒的にしのいでおり、その割合はおおよそ80%であるという。²⁵朗誦 *cantiler* や、つぶやくような歌語りなども前者に入れるとなると、その割合は当然もっと高くなる。特定の文芸ジャンルの事例をあげてみるまでもなく、昔話、おとぎ話、説話、笑い話等々の短い語り形式すべてがメロディー性を備え、なかに歌われる言表行為を多く伴う。シムファ・アロムなど音楽研究者が「歌寓話 *chantefables*」²⁶と呼ぶほど音楽的であり、まさに歌語りと呼ぶにふさわしい。

西アフリカのグリオに代表されるカースト的職能集団に許され、長年にわたる修行を必要とする王国や部族の叙事詩語りや、狩人の叙事詩、長詩などについてはすでに言及したが、²⁷そのいずれもが、常に楽器伴奏やコーラスを伴う。例外的にはマンデ諸語社会のフネ集団のように自らの職能をことばに限定し、楽器を持たず歌わず、レパトリー主題はイスラム関連の叙事詩や物語りのみという場合もある²⁸。彼らはイスラム到来とその伝播過程において、イスラム称揚のために誕生した。イスラムは教義伝達における音楽を禁止しているために、ことばのみの活動をすることは当然で、フネの音楽性遮断は宗教的である。したがって口頭伝承文化におけることばと音楽の一体化を検証するうえでの支障にはならない。一方、グリオ（狩人専属のグリオを含む）のレパトリーである叙事詩や長詩等は、語る本人が楽器を伴奏にする場合が多いが、ジェリムソ（女性グリオ）の場合には楽器伴奏はジェリ（男性グリオ）にまかせ、何時間にもわたる朗誦ではなく歌唱が多くなる傾向がある。その場合も外部世界で語りと歌唱を区別するような明白な部分のほかに、つぶやき、鼻歌風、メロディー性を多分に含むといった多様で曖昧な部分も多い。コーラスとの応答や、コーラスが歌い、リーダーヴォーカルが語ったり、あるいはその逆に展開する場合もある。

即ち、言表行為の様式の数々と、それらが伴奏付き/無伴奏等の可能性を考慮すれば、アフリカ社会の数以上に限りない結びつきがありうるといっても過言ではないのである。音楽付き或い

25 Jean Derive Llacan : Musique, performance genre littéraire dans la culture orale africaine in *Afrique, musiques & écritures*, Textes recueillis par Gilles Teulié, Coll. «Les carnets du Cerpanac» No 1, Université Montpellier III, Publications Montpellier, 2001, p.13.

26 Simpha Arom, in *Afriques, musiques & écritures*, *idem* p14.

27 出水慈子「西アフリカの叙事詩における独自性と特徴—類型、—モード、描写と比較」大東文化大学紀要第38号2000年、「女性グリオ…マンデ系諸語社会のジェリムソ」大東文化大学紀要第40号、2002年他。

28 出水慈子「バカリジャン」（西アフリカの『セグ叙事詩』より）をめぐって「現代のグリオ」 in 『口頭伝承文芸』日本口頭伝承文芸学会 2004年、「予言者ムハンマドを称える者-西アフリカ、マリのフネ」大東文化大学紀要第41号、2003年他。

は無しの発話行為、音楽付きあるいは無しの朗読、あるいは歌い語り、楽器伴奏なしの歌唱、伴奏なしの歌い語り等々、いずれも音楽性抜きにことばはほとんど存在しないといえる。さらに重要なのはことばと音楽の一体化は口頭伝承文化においては、音楽の優位性を内蔵していることである。したがってたとえ原稿に写されても、グリオのレパトリーは本質的にも伝統的にも聴衆の前で朗読される性格を失わないものはずである。

ひるがえってアフリカにおけることばの本質を検証してみると、現代の外部世界におけることばと同じではない。既述したように、²⁹ことばは生命の発揚であると考えられている。たとえばマンデ文化においてことばはニヤマ（超越的力）を有するとされ、発声を伴う身体的なことばであり、パフォーマンスを仕切ると同時に祝福や賞賛詩などになる。リズムカルに吐き出す力と口ごもる力のめりはりを利かせて物事を喚起したり、人を誘惑したりするために発せられることばである。グリオはときに「特殊な紐に結び目をつくり、それらをしっかりと口中にしまいこむ。このようにして結び目に呪術的力を封じ込め、紐はおまじないとなり」³⁰人を金縛りにしたり、茫然自失に陥れたりもする。グリオやほめ歌の歌手たちは王権保持者に働きかけ、王権の中立化や発動にも関与する。動きがたいものを動かさうるスピーチが、マンデをはじめとする西アフリカ口頭文化における真正のことばである。グリオのことばは鍛冶師や王権力者、戦士などと等しくニヤマを保持し、それをもって他の人々を思うように動かさうる。「グリオのこうした能力をなきものになどと試みようものなら、超越的な呪力により危険な目に会いかねない。」³¹このように、発声されることばが音楽と一体である理由は、超越的力とことばのダイナミックな関係にも原因しているといえよう。つまり、すべての形式やジャンルを問わず、さらに日常の言質、叫びや泣き声といったことばを介さない声による直接表現、呼吸、吐き出される音、おまじない等々にいたるまで、複雑で拡大的なニヤマの意味に裏打ちされていると人々は考えているのである。

もうひとつの事例をあげると、ヨルーバのコスモロジーでは「声によることばは形而上的力が現象世界に実現されるための鍵となる位置を持つ」。³²ことばは神々や先祖、精霊、オリーシャの住む異界にある様々な力を呼び覚まし再編成し、一時的に万物が仮住まいするこの世に顕現させるのである。呼び覚まされた力を活性化し、薬草などの薬物に超越的力を吹き込むのも声によることばであり、さらにことばにより表現されるイメージが、想像力を刺激して、力強い舞踏や行動を生み出すとも考えられ実践されている。西欧でも音楽は古代より聖性をもち、神話に遡るものだった。アリストテレスの言にしたがえば、古代ギリシャではそれぞれのジャンルはすべて固有の楽器伴奏を前提にしていたし、固有の韻律をもち、特有のリズムを刻み、部分的にあるいは

29 出水慈子「ンガラ 現代のグリオ」 in 『口承文藝研究』第21号日本口承文藝学会 1999年「マンデ音楽、誉め歌とはやり歌におけるジェンダーとメディア」 in 『大東文化大学紀要』2004年 他。

30 McNaughton, Patrick R.; Nyamakalaw: the Mande Bards and Blacksmiths. In *Word and Image* (July 1988) p.p.271-278.

31 idem p278.

32 Drewal; Dancing for Ogun in Yorubaland and in Brazil. In Barnes, Sandra *Africa's Ogun : Old World and New* Bloomington : Univ. of Indiana, 1989.

全体を通して歌われるものだった。中性ヨーロッパにおいても韻文は、少なくとも音楽性や聖性と切り離せなかった。時代を下るに従い、ことばも音楽も聖性を消失し、音楽とことばは歌唱形式に収縮した。音楽はことばの伴奏者として固定化された。逆に声はしだいに、主題と歌の意味を強調する役割を担うようになり、言説の効力を聴衆に訴える効果をあげることが目的となったため、聖性や内包されていた呪力や魔力が排除され、内容の芸術性や美を追求することになった。

アフリカの楽器ことばがトーン言語社会で生まれたことは先述したが、フルベヤやマンデのリュート、ファンのムヴェット（ハープリュート）ザンデのハーブ、マンディンのパラフォンやトーキングドラムなどが良く知られている。³³楽器の存在はことばとして発信すること以外にも、ことばとの弁証法的関係が重要であり、声で楽器演奏を記憶したり、声を楽器として楽器と競演したり伝承したりする、いわば音符の役割を代替している場合がある。ベニンのゲン、ブルキナファソのモシなどが代表的事例である。

以上のように、アフリカに於ける音楽は文学的言説の飾り以上の存在である。音楽は言表行為の本質に係わり合い、言説のステータスを保障するものである。同時にことばは生命を持ち、そのエネルギーは送り手と話し手による相互的発話を越えていくものであり、運用されたときの力は想像をはるかに越えるものとなる。呪文は殺傷力さえ保持し、祝辞は喜びで受け手をみたす。賞賛詩は賞賛されるものの偉大さを装飾するのではなく、その偉大さを現在に蘇らせ、蘇生したその偉大さを賞賛しているのである。そういう意味で、マンディンの英雄スンジャータ大王をグリオが賞賛し武勲を謳いあげるとき、叙事詩は偉業の実質とその活力の現在に於ける効力を実現させるために必要な形式であることが理解できる。聴衆はパフォーマンスの現場に英雄が、或いは英雄とともにマンディンの歴史を築いた先祖たちが立ち現れて、その偉業を再度繰り広げるのを感じ得る。聴衆はグリオに導かれ蘇生した歴史現在に参加しその偉業を讃えるのである。その事情は楽器ととてもおおむね同じであるといえる。楽器の音は先祖や幻想的生きものの声を伝えるメディアと考えられており、たとえばファンで演じ語られるファンタジー〈幻想物語〉は朗読者や歌い手、そして楽器を通じて伝えられる。それらを聞き分けながら、聴衆は長時間にわたり天界、地上界、地下界、深海等々を自由に瞬時に移動する幻想的生き物たちが活躍する世界を楽しむのである。イニシエーションや仮面崇拜などの儀式で使われる楽器も、先祖や多様な精霊などの生き物を具現させるために演奏されている。

最後に口頭伝承社会のジャンルについてディウラの事例を示し、ことばと音楽の一体化のまとめとしておきたい。ディウラ社会には特定名称をもつ口頭ジャンルは47種類あるという。³⁴ そのうち40種類は歌われ、割合としては85%に及ぶ。名称はドンキリ donkili (chant appel à la danse)を

33 アフリカ社会の多くで太鼓とことばは密接な関係を持ち、程度の多少はあるが太鼓とことばの一体化は重要な要素である。

34 Derive: Le fonctionnement sociologique de la littérature orale. L'exemple des Diula de Kong (Côte-d'Ivoire), collection <Sciences Humaines>, série <archive et documents>, Paris, Institut d'Ethnologie, 1988.

含む複合語である。コンヨン・ドンキリ (=nuptiaux 結婚祝い歌) や農業歌などのほかに説話など短い昔話が話芸としてあるが、どれも部分的には歌われるので、純粋に語りだけというジャンルは非常に少ない。40種類は歌われたり、語りと歌の混合様式だがすべて楽器伴奏がつく。つまり口承文芸にとって楽器は必要不可欠の要素として機能しているのである。したがって、ディウラ文化に属する者が、ある文学的言説のジャンルを特定するとき、作品内容は勿論その基準だが、微妙にジャンル分類が難しいことがあると、伴奏の音楽を聞き分ければ、その音楽によるジャンル分類は容易だという。音楽が物語りのジャンルやステータスを決定している証拠である。

西欧と異なり音楽が言葉のためにあるのではないし、人間の声によることばは“音楽的ことば”のためにある、つまり“音楽的ことば”は人間のフラットなことばを超越するのである。人間のことばは意味論上の展開をするものであるのに比して、“音楽的ことば”は存在論的により深い次元で発せられているのである。書き言葉の社会においては、何よりも先ず文芸というジャンルは言葉の様態 (enoncé verbal) の性質により、次に言表行為の条件、たとえば連続もの、メロドラマ、ドタバタ劇などと定義される。他方口頭伝承社会では、ジャンルはまずパフォーマンスの諸特徴が優先して考慮され、次に言語的様態にしたがい定義される。特徴のなかにはことばとして捉えられた音楽、多くの場合超越的な“音楽的ことば”が主要な役割を演じるのは既述したとおりである。

「ことばと音楽の一体化」のほかにグリオの言語＝音楽パフォーマンスにおいて重要な要素は、言表行為と言説の発話者のステータス、性別、場所、機会などがジャンル分類基準に関わる³⁵ことである。同じことばの歌をどのようなステータスのものが、誰々を対象としてどのような機会に朗誦するか、それらは複雑なコードに準じて行われ、それによって歌のもたらす意味が全く異なってくることは常に起こりうる。グリオは様々な要素の入り組んだ場面でパフォーマンスを行い、画一的な満足感を聴衆にもたらすのではなく、それぞれの立場で激励されたり誉められたり、意図的に揶揄されたりするようにパフォーマンスを演出する。パフォーマンスにおいてことばが十二分に力を発揮するべく、聴衆と双方向の総合的で長いやりとりを旨とする。こうした「ことば＝音楽」の複雑難解なありようは、グリオの西欧向け或いは西欧におけるパフォーマンスが圧倒的に音楽であることを理解させてくれる。外部世界へのツールとして容易に浸透しやすいことと同時に、口頭伝承の旗手たちにとって、音楽は得意中の得意の領域であり、アフリカ移民者にとっても、その二世三世にとってもふるさとの文化の本髄なのである。後述するウンドウールの例にみられるように、グリオの歌のレパートリーは外部世界の歌手のそれとは大きく異なるものを多く含んでいる。彼らのパフォーマンス経過も外部世界で行われるコンサートと完全には重複しない。西欧で催される場合に彼らも西欧風にアレンジするが、コンサートやナイトクラブなど以外でもパフォーマンスを行う（村の広場から個人宅まで）グリオの歌唱力や即興力、聴衆との

35 音楽のほかの重要な要素に関してはことばと社会との関係に関わるジャンル基準であり、西欧では本拠地のそれのように過度に重視されないのでここでは言及しない。

関係のあり方は、参加したものにしかわからない実感をもたらす事は確かといえる。

第5章 (イ) 奴隷解放後のアメリカ黒人とアフリカ文化

20世紀以前、西欧世界に様々な理由で移動し（させられ）到着先のヨーロッパ各地に四散定住したアフリカ出身者の定住形態や職種、人口数などに関する調査研究はほとんど行われておらず、80年代前半以降、少数の報告や考察が見られるようになったにすぎない。奴隷として或いはそれに類する範疇で両アメリカ大陸やカリブ海諸国に移住したディアスポラに関しては、単純に強制労働の担い手としての歴史があるのは確かだが、すべてを剥奪された奴隷の子孫が自由を獲得し、自己表現の主体となる過程において、彼らのルーツであるアフリカが完全に忘却され消滅したわけではない。というのもアフリカ系アメリカ人の主要な活躍領域であるジャズ、ブルース、ポップス、ラップ等々は厳密な特定はむずかしいものの、アフリカのルーツがあって誕生したといっても過言ではないからである。しかし、奴隷の中に多くのグリオや、彼らと類似の活動をする人々がいたに違いないにしても、それらの事実を特定し、グリオが奴隷集団の中にいたことにより、許される範囲での自己表現として音楽やダンス、物語などが伝承され影響力を持ちえたのではないかという仮説は想像の域を出ない。しかし、アフリカの諸言語や慣習を無視した寄せ集め奴隷集団とその四散分裂の過程では、常識的に推測して、ある部族や民族固有の伝承がそのままの形で伝承保存されることはなかつただろう。

このように文化的形成がほとんどない数世紀後、徐々に奴隷は自由を獲得し文字を覚え、楽器を手にいれ、多様な自己表現をするようになった。本章では、音楽領域を始めとする様々な領域における検証を将来の課題として別の機会に譲り、白人世界における「黒人性自覚」最初の例として、フレデリック・ダグラス（元奴隷）の語りを取り上げ、今後の研究の参考とする。

ダグラスが1850年代に書き残したものは、黒人の自由獲得闘争の記念碑的言説といわれ、多くのパラドックスと矛盾を内包するものの、そこには紛れもない「アフリカ性」がはっきり読み取れる。ダグラスのスピーチは W.L.ガリソンなど 奴隷制度廃止主義者サークルのメンバーが指導していたといわれている。ヴィクトリア時代の白人社会を風靡していた基本的人種観の根本を揺さぶることなく、白人の感性の範囲を逸脱しないように、当時のレトリックにおおむね忠実に等々の自己規制をダグラスに強力に勧めたのである。³⁶自分自身を語らないこと、語る主体は自由獲得を渴望する黒人でありダグラスではないように書くこと、プランテーションの事実もほんの少々しか書かないこと、ダグラスは解放されていたが、解放奴隷という立場でことばを発しないように等々注意したという。黒人のことばが当時の人々の耳目に達するためには、「ご主人の声、そ

³⁶ Andrews, *To Tell a Free Story: The First Century of Afro-American Autobiographies: 1760-1863*. Urbana: Univ. Illinois Pr., 1986., p.89.

の言語、修辞法」を習得し、それらをもってして初めて自由への道が開けた時代だったのである。ダグラスは1945年に刊行された自伝³⁷を代表とする著書やスピーチではガリソンらに忠実だったが、次第に彼自身の声、彼自身の自在な物語、スタイル、レトリックなどに脱皮する努力を払うようにはなった。しかしそれも、当時の状況やアフリカ系アメリカ人自身の自由は依然として大きな束縛と限界を伴うものだった。

そして次なる重要課題として彼らが行うべきことは「アフリカ系アメリカ人＝黒人」としてではなく、また奴隷としてでもない黒人として、白人社会で認知されるべく努力することであった。そのためにはご主人の文化の大枠を徐々に否定しつつ、同時にアフリカ文化を豊かな意味と価値を持つルーツとして取り戻し、その背景のなかに自分たちを位置づけする必要があった。黒人であることは白人が白人であること同様に素晴らしい、という認識を黒人自身が獲得するようになる以前に、白人社会において黒人として認知されること、認知されることが大事だった。したがって「黒人の文化的パフォーマンスは人々の心理や、偏見を変えるためにある」という結論に達したのである。根拠にされたあとのルーツ再獲得はこのような必要に迫られた上でのことだったとはいえ、奴隷たちにとっては革新的な自己再認識のプロセスとなったと考えられる。というのも、アフリカ大陸において歴史的に、奴隷制度は常に存在していたが、その制度は（1）白人との関係において黒人のみが奴隷であるのではなかった（2）異民族、異部族を問わず奴隷となっても、未来永劫変更することなく奴隷であるわけではなかった（3）即ち、アフリカの制度に組み込まれている奴隷は時間、世代、結婚、戦争による逆転等々の事情発生により、いずれは非奴隷身分に「融合されていくべき」変転可能な位階だった。位階制度崩壊後の今日でも、元奴隷出身のドレイ家臣が行政をつかさどり、支配層である王侯貴族、首長などと並立的に位置づけられている制度がアフリカ各地に多く見られるのはそのためである。³⁸

1852年にダグラスは、ニューヨークのロチェスターで独立記念日のスピーチを依頼されたが、白人社会との間に連帯もなく、自由も手にしていない黒人にとって「独立記念日は我々の祝典ではない」、そして「大雨や竜巻そして大地震のごとき力を発揮する歌よ出現せよ」と彼は演説した。この時以降、彼は徐々にビクトリア時代の白人の語り形式を脱し、聖書の他にアフリカの伝統的・神々の神意の表れとして地上を襲う自然破壊力を喚起し、西欧とアフリカの神話性の両者の調和を見出すようになった。ご主人の言語を母語として西欧性からの脱皮を図るために、アフリカ性を新たに習得するようになり、彼はアメリカにおける「ことばの師」と認められるようになったといえる。一度失ったルーツの文化を新たに習得することで、完全なアフリカ人ではないが、アフリカ系アメリカ人としての文化的アイデンティティの獲得が、彼らの自由獲得、真の解放へ

37 Douglass, Frederick, *Narrative of the life of Frederick Douglass, An American Slave, My Bondage, My Freedom; and The Heroic Slave*. Ed. William Andrews, The Oxford Frederick Douglass Reader. New York: Oxford Univ. Pr., 1996.

38 嶋田義仁『牧畜イスラーム国家の人類学 サヴァンナの富と権力と救済』世界思想社 1995。『優雅なアフリカ』明石書店 1998。

の階梯においては必要不可欠な要素だったといえよう。グリオがことばの根源に湛えているアフリカにおける「ことば＝音楽」や、ことばの生命力、呪力、動きがたいものを動かす力、権力にも働きかけることばは、それにふさわしい修辞法を持つ。ダグラスが根絶された状態から新たな文化的アイデンティティを形成した過程に見られたことは、グリオのそれと同一ではないが、西欧の修辞法やインスピレーションのみではない、アフリカ系アメリカ人の黒人性創出の努力である。そのさいの「黒人性」はアフリカそのものではないが、西欧そのものでもなかったことは間違いない。

(ロ) 現代のグリオ：ユースール・ウンドゥールと西欧

伝統的グリオの固定的になりがちな像を、メディアの急速な進歩やグローバル化というコンテキストで再度位置づけるべきという主張もある³⁹。たとえばボストンで時々催されるグリオのパフォーマンスは通例、アメリカ在住（一時的出稼ぎ或いは移民、留学等々）のアフリカ人少数を含むアメリカの聴衆（白人とアフリカ系アメリカ人）を相手に行われる。アメリカで成功を収めたいグリオ（アメリカ在住かアフリカから招待されたかを問わず）と、未知を求めるアメリカ人、ルーツを感じ取りたいアフリカ系アメリカ人などによるが、それはヨーロッパの観光客や遠いルーツさがしのアフリカ系アメリカ人がアフリカへ行く場合に共通する「ある種の誤解と錯覚」がつきまとっている。このようなグリオのコンサートは、エレキギターバンドをバックにインターナショナルな音楽と歌が大半を占め、肝心のグリオの演奏はほんの一部でしかないことが多い。グリオ登場以前に聴衆は通路を占拠し、所狭しと踊り始める。アフリカのダンスにはステップがあるはずだと思っても見ない彼らは、とにかく踊り狂うのがアフリカの、いや本当のアフリカだと思い込んでいる。アフリカのグリオが登場し、神妙に聞くべきアフリカの古典をコーラで演奏してもワールドミュージックとの区別は勿論つかないし、アフリカの留学生たちは戸惑うばかりである。しかし当のグリオはその種のちぐはぐコンサートには慣れており、本当はこうだなどと苦言を呈さないし、むしろ「お好きにどうぞ」とにこやかに構えてコンサートは成功するのである。

これをグリオの本拠地で行われるコンサート風景と比べると興味深い。ガンビア各地で開かれるコンサートは、開始時刻予定より2時間以上遅れることがほとんどである。原因はグリオのパトロンである政財界のお偉方が到着しないからだ、取り巻き連がぼつりぼつりと現れるたびに、ほめ歌が朗唱され、お金やギフト贈呈がBGM演奏とともにえんえんで行われる。しかし、来賓予定者中のトップが到着しないかぎり、メインのグリオは勿論、主な出演者のパフォーマンスは始められず、聴衆は苛立ちながら待つしかない。結局、コンサートはパフォーマンスのさわり部

39 Ebron Paula Angeleac, *Negotiating the meaning of Africa: Mandinka praises singers in transnational contexts*, UMI, 1993.

分のご披露で終わることが多くなる。グリオがCDやラジオ、テレビを介して不特定多数の聴衆に依存するようになった今日でも、コンサートでは政財界、地域の支配者層のパトロナーを優先するのがグリオの慣わしである。

表面的には、アメリカやヨーロッパでのパフォーマンスはある種の誤解と錯覚の上に成立しているといえるが、グリオの地におけるコンサートで見られるように、グリオのパフォーマンスはそれを支える人（聴衆、パトロン、スポンサー）に沿いつつ「お好きにどうぞ」が基本であることを想起すれば、それでよしであり、そのスタンスがグリオの外国でのサクセスを呼んでくれるのである。グリオの言質と音楽を聞く耳と知識を有する人々、とことん支えてくれるパトロンたちのために演奏するのが伝統社会におけるグリオの鉄則だったが、聞く側に要求される必要条件を満たす聴衆は伝統社会崩壊に伴い消失し、条件の一部のみを満たす聴衆にグリオは適応しているのが現状である。これが「グリオの真髄だ。理解せよ」は通用せず、また事実グリオはその柔軟性において常にその活動を維持してきたのである。同時にいえることは、グリオは文化人類学的観点から伝統的なイメージ（グローバリゼーション以前の固定的な）をもって描写され語られることが多かったが、今日のグリオは「そのようなグリオはもういない」と嘆息するより、むしろ地方の定住型、都市部型、地域と密接に結びつきながらも、地方巡業やCDなどコマーシャルベースを活用したり、機会があればヨーロッパ、アメリカ、世界ツアー、アフリカ大陸内ツアーなどの、契約による移動活動型等々、多様な活路を開拓している。むしろ逞しいグリオのありようをもってしてグリオの真髄と評価できるのではないかと稿者は考える。以下にその最先端を行く典型例として、世界的に有名なグリオ、ユースール・ウンドゥールをあげて考察してみたい。

ユースール・ウンドゥール（1959年ダカール生）はセネガルの由緒あるグリオ家系出身で、祖母の補佐として幼少時から歌い始め、各種儀式に参列、実地に修行した。12歳のときにはすでに歓楽街のプリンスと呼ばれて有名になっていたが、芸術学院に入学後、作曲や演劇を習得し同時に演奏活動も行なった。75～79年の4年間、セネガルで一番有名なバンド「マイアミスターバンド」の伴奏でナイトクラブに出演、多数のカセットも出した。79年に自ら率いる「ダカールの星」を結成（のちに「スーパーエトワール」に改名）した。

グリオである彼は口頭伝承やアフリカ文化の価値を重要視し、母語であるウォロフ語でアフリカの現実や日常、ダカールやサンレイの歴史、庶民の暮らしぶり、貧困、家族、友情などをテーマに歌い続けた。こうして数年後には、セネガルばかりか西アフリカを代表する歌手となった。84年にヨーロッパに旅立ち、フランスで開催されたアフリカ・フェスティバルに参加した。これをきっかけにセネガルを始めとするアフリカ出身移民者に評価されると同時に、彼自身もその存在を強く意識するようになる。彼らに向けて歌うこと、語りかけることはアフリカで行うパフォーマンスとは異なる意味を持つからである。彼のパフォーマンスは西欧に進出するアフリカ音楽であると同時に、西欧に生きる移民者が祖国に生きる人々とは異なる文化受容やアイデンティティ形成をする過程に、グリオとして双方向的に関わる事実を自覚したからである。85年ブルジュ

の春の祭りに参加し、初めてのCD『移民』を出した。その後も西アフリカ、フランス、ヨーロッパツアー、アメリカ、カナダへのツアーを果たし、ムバラックス大使と呼ばれ、セネガル音楽を普及することになった（92年にはグラミー賞を受賞している）。88年以降、彼は正義を問う運動への参加を開始、93年ユニセフ大使に任命されるとともに、世界的に不動の地位を確保した。現在もエイズ撲滅、援助と行動委員会など多くの運動にマンデラとともに参加している。95年にはアフリカのグリオに捧げるCD『アフリカの心の声』を出し、2003年、イラク戦争に反対してアメリカツアーをキャンセルした。

以上の略歴はウンドゥールがグリオの道を忠実に歩み、その意味では生地に定住し一生をそこで終わる伝統的的典型グリオと根本的には違わないことを示すものである。世界的なスケールは並のグリオに多くはないが、歴史上のグリオも、現代のグリオも本来グリオは“旅をする人”である。ウンドゥールの世界的スケールはメディアの発展、交通手段、移民者等々、現代特有の社会的現象に彼の才能と活動が適応しているからである。数百年前、それらがなかった時代でも、グリオは多数の言語を駆使してアフリカ大陸内を移動し社会や政治に参加した。現代のグリオとして過去の名グリオと異なるのは以下のような理由で都会中心型グリオの典型であるという点である。

- 1：生地ダカール（セネガル）を活動拠点として、幼少より各種儀式に参列、式の経過と構成要素、グリオの役割等々を総合的に習得した。
- 2：ナイトクラブを中心にムバラク（セネガルのポップス）の旗手として人気を得た。
- 3：人気が出るとともに興行先を遠隔地に拡大（アフリカ各地でツアー・フランスの各種フェスティバルに参加・移民を踏むフランス人の人気を獲得・ヨーロッパ各地ツアー、アメリカ大陸）した。
- 4：アフリカを根拠地として他の地域にでかける。（拠点を欧米に動かさない）、ウォロフ語と行き先地のことばによる歌を発表している。
- 5：ことばを介して社会参加（政治的人権侵害、イラク戦争反対など）、平和的解決（ユニセフ国連大使、エイズ撲滅）参加を実行している。
- 6：後身の指導援助（グリオは拡大家族が同居し、幼少時から指導を受けられる。たとえば孫世代を教えるのは祖父母の重要な役割である。また実地修行は重要な要素だが、次世代、孫世代をどんどん登用して実力をつけさせる）に際しウンドゥールは慣習にとらわれることなく、出自を問わず若手歌手たちに、現代の歌手に必要なスタジオ、各種楽器などを提供し、様々なコンサートの機会を彼らのために用意している。

では他方、彼の歌そのもののどこにグリオ性が見られるか？主要な要素を挙げてみる。先ずレオポルド・サンゴールのアフリカにおける歌と詩の関係定義を引用してみると、

私が育った村の女流詩人マロネから得た一番大事な教えは、「詩は歌である、歌でなくとも音楽である、詩は文学表現のネガとしてあるのではない」ということだ。詩は同時

に歌であり、ことばであり、音楽であるときにのみ詩として真の姿をあらわすと私は確信している⁴⁰。

センゴールの定義はアフリカ文化に共通の考え方であると同時に、西欧古代の詩法にも共通しているが、ウンドウールの詩に於いてもその根幹を成している。ムバラクの旗手の詩的源泉はセネガルの口頭伝承による詩＝歌＝音楽にあるのはいうまでもないが、フランス文学作品、とりわけフランス詩法の影響も受けている。ウマール・サンカレーはそれらをジャンル分類により検証している。⁴¹「アフリカ口頭伝承から、おとぎ話、ほめ歌、ことわざ、西欧文学ジャンルから、寓話、エレジー、劇、宗教歌、歴史、批評などである。〈ほめ歌〉は、西欧ではジャンルとして独立して分類されていないが、アフリカではグリオ起源譚の核を成すほど重要である。サンゴールも数多くのほめ歌を書いている。⁴²たとえばウンドウールはダガナ在住のチアム一族にたいして典型的なほめ歌を歌い上げているし、当時サンルイの文化官庁長官であったアルマニ・M. フォールにほめ歌を捧げ「我らがヒーロー、フォールをサポートしよう 我らが力を見せてやろう」と聴衆に歌いかけ、「フォールは王を敬い、臣民を敬い、仲間を敬った」と終わっている。これは公的儀式でグリオが貴賓席にいるお偉方に対しほめ歌を捧げ、締めくくるときの決まり文句である。他方〈ことわざ〉は具体例の枚挙にいとまがないほど数多い。「この世の誰にも寿命がある」、「世間は裏切りと嘘八百」、「喜びはほんのつかの間」、「昨日は過ぎたこと」等々、多くの諺を現代の大衆を歌い物語った歌の中に折込み、先祖代々伝わる知恵による人生訓や諦観と聴衆の生きる時代と状況への和解を示唆している。時を越えたアフリカ文化は、変貌激しい時代を生きる現代人や異文化の中で生きるアフリカ移民者を勇気づける歌となっている。

次に西欧文学ジャンルからの具体例をあげてみる。〈寓話〉はウンドウールが多用しているジャンルで、ド・ラフォンテーヌの影響を強く受けていることが明かである。たとえば『ガイドWommat』では「農民と息子とろば」のほとんどを援用しているといって良い。「無責任な他人のいうことにいちいち耳を貸すな」という教訓はド・ラフォンテーヌのそれと全く同一である。一方、ド・ラフォンテーヌの「召使と徴税官」を下敷きにした『マネーXaalis』では異なる結論を出している。いずれも、得意の本歌とり技法を用いてフランス文学古典から独自の作品を創出した事例である。〈歴史〉は西欧におけるジャンル名称で、アフリカには同類のジャンルはないと稿者は考える。歴史は客観的事実に関心があり、それらを列挙し分析解説するが、グリオの関心は民族英雄の偉業に関心がある。したがって〈物語〉〈叙事詩〉に類する名称を与えられているのが常で、ウンドウールも例外ではなく、植民地政策や奴隷制度、人種偏見に抵抗した英雄の偉業がテーマである。たとえば『ニュー・アフリカ』ではS. A ジョーブ、K. エンクルマ、S. ピコなどアフリカ史に残る抵抗の英雄を列挙し、「彼らこそがわれらの英雄」と歌い、『ピリ

40 Senghor, *Postface aux Ethiopiennes*, Oeuvre poétique, Paris, Seuil, 1990, p.167.

41 Oumar Sankhane, *Yousou Ndour, Le poète*, Les nouvelles Editions Africaines du Sénégal, p.p.26-51.

42 Senghor, *Taga de Mbaye DYOB, Hosties Noires* in Oeuvre poétique, Paris, Seuil, 1990.

マ』では植民者との協力を拒否して毒殺された D. ビリマを歌っている。〈批評〉に分類される歌では、社会や政治だけでなく、文学批評さえも含むことでもわかるようにグリオの歌はあらゆる対象を俎上にのせ、グリオ自身の考え、批判、賞賛など多様なメッセージを盛り込むのが本来の機能である。ムバラクにのせウンドールが発信するメッセージは、文字文化の聴衆が文学で読む内容を多く含みつつ音楽として届けられるのである。

さらに彼の自由詩創作のさいの作詩法においては、口頭伝承における伝統的詩法と、フランス詩法（エリジオンやイアティス、さらにリズム、韻のふみかた等々）に忠実に従い、ウオロフ語の作詩においても二つの詩法に忠実な優等生ぶりであることを加筆しておくが、彼の詩法については本章の目的を逸脱しているので別の機会にゆずることとしたい。

終章 文化ベクトルとしてのグリオと西欧

アフリカ人ディアスポラの序章ともいうべき“西欧のアフリカ人”に関する研究が端緒についたばかりであり、加えて、行き先国に帰化した人々の異文化受容とアイデンティティ形成の探求は歴史を遡るほど困難なため、影響力を持ちえたと思像されるグリオの存在については推測の域に留まる以外にない。この現状をふまえたうえで、現代グリオを念頭に本稿をまとめておきたい。現代のグリオは過去のグリオに比して、通時的視点のみでは網羅しきれない、拡大的な規模で西欧との関係を結んでいるからである。

グリオは職能集団としての誕生時から封建制度時代、現代に至るまで一貫してパトロンに依存する存在である。彼らの生業形態は報酬、寄付、贈り物などの特別収入だが、その源であったパトロンは封建制度崩壊とメディアの急速な進歩により大きく様変わりした。位階制が消滅し、王侯貴族、軍人、首長を頂点に農民、商人などかつてパトロンだった「自由民」が細分化した。資産家、軍関係者、地域の地主層や官僚、企業家、小規模経営者、研究者、平和部隊関係者、国際的運動支援関係者、現地アシスタント、観光客、コンサート組織グループ、音楽界業者、お偉方の取り巻き、使用人、近隣の一族等々に加え、全世界の CD やカセット購買による収入も、不特定多数の視聴者も広い意味でパトロンとなった。

またパフォーマンス開催地、その環境と規模、形態も多種多様になった。アフリカの村々、都市部、アフリカ大陸内外はもちろんのこと、ヨーロッパやアメリカ大陸を中心にアジア、オーストラリアにもその活躍は及んでいる。地元の村々や都市部における伝統的な職能に加え、都市部歓楽街、ホテル等で行うコンサート、緑化促進、文盲やエイズ撲滅キャンペーンなど国策協力コンサート、個人的コンサート、メディア出演、資産家や先祖代々顧客である一族宅での朗誦や歌唱、各種儀式参加、需要があればどこにでも彼らは赴き、必要とされる「ことば＝音楽、語り」の仕事を引き受けている。西欧での活動は聴衆のほとんどが移民者、或いは西欧人であるコンサート、全世界を市場とする CD やカセットの発売などだが、ほかに移民者居住地域、在外公館や海

外滞在のビジネスマン宅に於ける各種儀式など、アフリカで行なう伝統的活動と変わらないものも多い。

近年グリオの職能とそのありようをめぐる、“土地固有の文化の子”に変わり“ベテラン旅行家”、“忠実な伝承者”にかわって“小ずるい策士”、“伝統的知識の図書館”のかわりに“創造的個人”、“寄生的依存者と無力な大道芸人”には“成巧者”、“ことばの師”に対しては、“口先ばかりのおしゃべり”等々、研究者は対立的諸相を浮き彫りさせてきた。職能集団として依存し束縛されていた封建的時代終焉後、グリオの間で厳しい淘汰が行われ適者生存が明白となり、研究者の眼にはグリオたちが二項対立的に映じた結果であろう。同じような事情はグリオの活動についてもいえる。単純に伝統的と現代的、地方と都市部、営利的と非営利的、固有文化内と国際的、フォーマルとインフォーマルという図式的分類で研究者が説明した経緯があったが、グリオのパフォーマンスのなかには対立的分類ができるものもたしかにあるが、現在この手法は万能な分類法とはいえなくなっている。たとえば民族の主要叙事詩朗誦はフォーマルだが、さわり部分を研究者や外国人相手に語ることがインフォーマルかフォーマルか分類する意味はないからである。

ところが、グリオのパフォーマンス内容と受け取る側にとってのパフォーマンスの意味と価値は、西欧における活動と本拠地におけるそれでは大きく違ってくる。アフリカの村と都市部でもそれはいえるが、移民一世と二世三世にとって、スンジャータ大王は民族伝説の英雄ではあっても、カンガバに残る麗々しい神話的儀式空間に蘇る英雄ではもはやありえないからだ。距離的空間のみならず、そうした受容者側の心理的空間の多様で複雑な広がりをもたらしながら、グリオは嘆いてはいないように思える。ウンドウールの例でわかるように、本拠地で熱く迎えられる物語と世界に通じる物語との相違を認識したうえで、一流のグリオ音楽を作詞作曲している。西欧のアフリカ移民者や異文化の聴衆を対象にすることをもち、逆にグリオたちは変貌し、脱グリオをとげている証左といえるだろう⁴³。

移民者が西欧と遭遇し、西欧も遅まきながら移民者を認知するにしたがって、“双方”からアフリカの口頭伝承文化が認識され始め、グリオは単なるアフリカの歌手たちではなく、文化ベクトルとなったと稿者は考える。移民一世にとっては異文化に滞在することにより意識化し鮮明になった母なる文化、二世三世にとってはルーツであり誇りをもってそれぞれのアイデンティティに吸収したい文化、西欧の聴衆からすれば、アフリカのイメージを進化させるに足る真正な担い手と認められたのである。野生的ビートから宮廷の古典音楽に至り、なんでもこなす音楽家、口頭伝承のことばの専門家であり、ほめ歌を即興し、古典を朗誦するひとびとであることも、とりわけアフリカ系アメリカ人の琴線をゆさぶるのである。移民者や外部世界の関心や好奇心にこたえて進出するグリオの、新たな状況下の新たな諸相、強調されるべき側面にも注目する必要があるだろう。

43 ウオロフやバンバラのグリオには、だからこそ、地元に残り固有の文化性を固持する姿勢を崩さない人々も多いが、ここでは言及しない。

ひるがえって、本拠地でも西欧でもグローバリゼーション状況下でも安定して変わらない点は何か。まずパトロンとの関係がある。グリオのパトロンは先述したごとく大きく様変わりし拡大的になったが、両者の関係は安定して変わらない。グリオのあくまでも丁寧なたたかき、パトロンを誉めるが諫めもする、万が一には非難もいとわない等々の基本は、実力あるグリオと伝説の偉大なグリオにおいて共通している。第二にグリオの移動は、国内から大陸内、そしてヨーロッパやアメリカ、ワールドツアー等々常に拡大的である点も変わらない。グリオにとって旅は幼少時より、修行の階梯であると同時に成功を示す勲章でもある。第三に活動内容も本質的に変わらない。行く先々のことばを習得する、どこの言語であろうと言葉であれば彼らの生業範疇となる。

“作詩法の重要視、レトリックの使用もことば修行のうちにあり、ウンドウールのようにフランス詩法にも通じて援用している例もある。第四は社会参加、大義への協力であり、第五は聴衆との双方向関係であり、これらは前章で論述した通りである。

他方、現在の西欧進出状況で目立つようになった側面は、ワールドミュージック・シーンで活発に実績を示している起[企]業家的側面である。グリオはアフリカの伝統文化が西欧の後期資本主義社会の消費的文化のなかで消化されやすいようなイベントとして、多くの機会と音楽を提供し続けている。西欧のプロデューサーに提案し商談をまとめ、パフォーマンス内容を協議し実行する過程で、確実にアフリカ文化の意味や価値を消費される文化材料として浸透させている。

“真正のグリオ芸術”を求められれば応じるが、グリオ側から押し付けようとはしないのが彼らのスタンスである。そういう柔軟なありようの中で自らも変貌しつつ、そのインターフェースそのものも変貌させ変化させている。グリオの活動ジャリヤ *jaliya* が、ことばの奥義を極め鑑賞し、感嘆できるひとびとのみを聴衆とする時代、グリオは商談や協議をする主体ではなかった。対応はあくまで柔軟だったが、“ことばを発してはならない自由民”と協議することなどありえなかった。しかし現在西欧で成功しているグリオは“土地固有の文化の子”であるよりはベテラン旅行家、忠実な伝承者よりは小ずるい策士、伝統的知識の図書館よりは創造的個人、寄生的依存者よりは企業家、無力な大道芸人よりは成功者”と評される相貌を呈している場合も多い。ローカル/グローバルが対立的にも共立的にも存在する現在、グリオ各人の裁量と需要によりその選択がなされているからである。

最後に稿者からみたグリオの“今後の課題”をあげておきたい。グリオは伝承を一言一句変更しない伝統保持者であると同時に、特有のスキルを駆使して物語りを再解釈し、位置づけを修正し、現在および未来の多様なサイトのためにアフリカの過去を再創造する。しかし西欧に進出しグローバリゼーションにのろうとすると、歌唱、朗誦、楽器演奏、ダンスなどのパフォーマンスが“成功したグリオ”の主要な活動となる。それは口頭伝承文化の本質的言表行為の発揚であり、彼らにとって自然な職能には違いないが、それぞれの文化の核である多くの伝承を担い、彼ら自

44 稿者はグリオに何度もインタビューしているが、実力のあるグリオほど、「日本に行きたい」「日本語であなたの系譜を語り誉め歌を捧げる事もやぶさかではない」という要望をお世辞ではなく表明した。

自身がグリオの職能で最も重要と主張してやまない和解をもたらす“メディエーター”としての職能から遠去かるのも厳とした事実である。自己のパフォーマンスのために“交渉する”ことは、第三者として抗争の仲介、和解を導く職能と質的に異なることは否めないからである。

(2004年9月21日受理)